

**J-GP2**  
ALL JAPAN ROAD RACE CHAMPIONSHIP  
RACE  
REPORT & INTERVIEW

# 手に汗握る大バトルを制し 浦本修充が全日本初優勝を達成!

ポールシッターの関口太郎がホールショットを決め、野左根航汰、渡辺一樹、生形秀之、野田弘樹と続く。2番グリッドからスタートした浦本修充は出遅れてしまい、オープニングラップは関口、野左根、渡辺、野田、生形、浦本の順でホームストレートに戻ってくる。2周目、2番手につけていた野左根が2コーナーの出口で転倒を喫してしまう。一方、浦本はこの周にポジションを2つ上げ4番手に浮上する。トップ争いは、3周目のダウンヒルストレートで関口に並んだ渡辺が90度コーナーで前に出ていく。後方では岩田悟、野田をかわした浦本が3番手争いの先頭に立っていた。浦本は1分54秒台のハイペースで追いつき、7周目にはトップ争いの2台に追いつき、三つ巴の戦いになっていく。そして9周目のダウンヒルストレートで関口のスリップについた浦本は90度コーナーで2番手に浮上。ここから渡辺との壮絶なバトルが始まる。

11周目、90度コーナーのブレーキングで渡辺のインに飛び込んだ浦本。渡辺も引かずクロスラインとなるが、浦本が抑え、このレースで初めてトップに立つ。しかし12周目に入った1コーナーで、すぐさま渡辺が浦本のインを突きポジションを奪い返す。直後のS字コーナー一つ目ではあわや接触かという接近戦で、手に汗握る展開が続く。13周目に入ると1コーナーのブレーキングでラインを外した渡辺のインから浦本が前



浦本修充

に出るも、3コーナーでは渡辺が抜き返す。続くV字コーナーでは、またも浦本が渡辺のインを突き、ヘアピンカーブではクロスラインのあげく浦本がトップを守る。2台がコースレコードを塗り替える走りで激しくバトルを繰り返している間に、3番手の関口は徐々に離されてしまう。

文字通り一騎打ちとなったトップ争いは、15周目、渡辺が5コーナーで浦本からトップを奪い返すと、バトルは少し落ち着きを見せたかに思われた。残り2周を切った17周目、浦本がS字コーナー進入で渡辺を抜き迎えた最終ラップ。

渡辺が2コーナーで浦本のインから前に出ていき、最後の勝負どころとなる90度コーナーを迎える。ブレーキングで渡辺を抜き去った浦本に軍配が上がり、浦本は全日本初優勝をもち取った。2位となった渡辺との差はコンマ1秒だった。ケガの影響もありレース終盤にトップ争いから引き離されてしまった関口は3位表彰台を獲得。4位の岩田、5位の野田はそれぞれ単独でゴール。6位は高橋英倫、生形がコンマ6秒差の7位と続いた。



## 2位 渡辺一樹 (右写真左)

予選まで固いタイヤを使ってたんですけど、決勝日の朝フリーで、やわらかめのタイヤに変えてみました。それでレースディスタンスを走ったことがなかったので不安はありましたが、どちらにしろレース序盤は前に出ることしか考えていなかったんで、後半は、タイムがもっと落ちると思っていたのですがソフトタイヤが意外にもってくれて、なんとか後半までレースができました。ツインリンクもてぎにはいろいろな思い出があるのですが(苦笑)…、それを払拭でき、1年以上ぶりのレースで表彰台に乗れたっていうのは、自分にとってよかったです。バイクも1カ月くらい前にやっと形になったのですが、ここまで仕上げるのができ、予選でけっこういいセッティングが見つかったんで、次の筑波で勝てるように、もうワンランクレベル上げていきたいですね。

## 優勝 浦本修充 (右写真中)

思ったよりも周りのペースが最初から速かったですね。(スタートは)ちょっと出遅れてしまいましたが、追いつけると信じて落ち着いて行こうと思った。(渡辺に追いついてから)一番理想的なのは抜いて、ぶっぎることでしたが、思ったほどペースが上がらなくて、(渡辺)一樹さんと激しいバトルになりました。最終ラップまでのバトルは完全に想定外でした。抜かれたらこうしよう、と考えていたことはあるんですが、その前のコーナーで一樹くんも、(スピードを)うまく乗せてきたり。最後は落ち着いてヘアピンで乗せて立ち上がり、90度コーナーでインを刺そうと思っていたのがうまくいきました。できればコースレコードを樹立して勝たかったんですけど、そんなに甘くないってことですね。でも初優勝なので素直にうれしいです。

## 3位 関口太郎

(腋窩[えきか]神経麻痺である肩の具合が悪くて)レース中、何をしてるのかわからないくらいでした。(浦本)ナオに抜かれて、(渡辺と)2人でやり合うだろうと思って、途中までは後ろで見えていたんですけど、そのうち、左手の感覚がだんだんなくなってきたので右手で乗るようにしました。アクセルを開けるのも大変で、ブレーキもかけられない感じになってきて、なんとかついていけるかなと思ったけれど、無理は、できませんでした。今年はいいマシンに乗っていますし、去年よりはアベレージ的にもいいタイムで走っていたのは、よかったです。